

# 高等学校教員による発達障害への教えづらさに関する研究

—高等学校から特別支援学校高等部に異動した教員の専門性を中心に—

○土谷 充章  
(大分県立爽風館高等学校)

衛藤 裕司  
(大分大学教育学部)

KEY WORDS: 高校教員, 特別支援学校, 発達障害

## 1. 目的

本研究の目的は、高等学校に勤務経験のある特別支援学校高等部教員を対象として、授業場面における教員が感じる「教えづらさ」について質問紙による調査を行い、発達障害のある高等部生徒への教員の「教えづらさ」の実態を明らかにすることである。

## 2. 調査対象者

A県の特別支援学校高等部に勤務する教員のうち、高等学校に勤務経験のある者74名であった。

## 3. 質問紙

質問紙の内容は、以下の通りであった。

- 1) 対象者の基本属性に関する質問紙 (全16項目)
- 2) 授業の実態についての質問紙 (全29項目、その内の11項目は5段階のリッカート尺度で、18項目は記述式又は選択肢であった。リッカート尺度の選択は、1:「全く感じていない」、2:「ほとんど感じていない」、3:「どちらともえない」、4:「どちらかといえば感じている」、5:「とても感じている」であった。)

## 4. 方法

### 1) 手続き

郵送法または対象者に直接手渡しする方法で配布し、記入を依頼した。

### 2) 結果の分析方法

授業の実態についての質問紙から、リッカート尺度の選択の「1」を1点、「2」を2点、「3」を3点、「4」を4点、「5」を5点として点数化し、全体の平均値と標準偏差(以下「SD」とする)を算出した。特別支援学校教諭免許状所有者を専修・1種免許状所有者と2種免許状所有者で2群に分類し、それぞれの平均値とSDを算出し、t検定による差の検定を行った。

## 5. 結果

特別支援学校教諭免許状の違いによる発達障害生徒への授業に関する困難感の結果をTableに示した。専修・1種群における平均点の高い質問項目順に並べている。

その結果1位「必要な指導方法の学習」、2位「発問の特別な工夫」、3位「特別な指導法の習得」、4位「当該学年レベルの学習内容の設定」、5位「高校での情報交換の機会」、6位「『身の回りのもの』を使用しない授業」、7位「教育課程の進度の遵守」、8位「高校と比べての授業展開」、9位「7割程度以上の内容理解」、10位「生徒とのコミュニケーション」であった。そのうちの上位2項目の「必要な指導方法の学習」と「発問の特別な工夫」について、5%水準で有意差が見られたが、その他9項目については、有意な差は見られなかった。

## 6. 考察

今回の調査で、発達障害のある生徒への授業に関する困難感とは、より専門性の高い専修・1種免許状群の方が「必要な指導方法の学習」、「発問の特別な工夫」に関して、高い困難感を示した。

このことから、専修・1種免許状を所有している専門性の高い教員の方が、指導方法のより具体的なことに関して、難しさを感じているのではないかとということが言える。

一般的には、専門性の低い2種免許状のみを所有している教員の方がその必要性をより感じているのではないかと考えられるが、具体的な指導方法に関しては、専修・1種免許状群は最高の評定値に近い値が平均値であった。このことから、より難しさを感じていたことが伺える。

(TSUCHIYA Mitsuaki, ETO Hiroshi)

Table 特別支援学校教諭免許状の違いによる発達障害生徒への授業に関する困難感の比較

順位	質問項目	専修・1種群		2種群		t	p
		平均	SD	平均	SD		
1	必要な指導方法の学習	5.00	0.00	4.47	0.55	2.610	*
2	発問の特別な工夫	4.89	0.31	4.40	0.66	2.113	*
3	特別な指導法の習得	4.33	0.82	4.37	0.72	-0.117	ns
4	当該学年レベルの学習内容の設定	4.22	0.79	4.43	1.00	-0.560	ns
5	高校での情報交換の機会	4.14	0.83	4.17	0.79	-0.083	ns
6	「身の回りのもの」を使用しない授業	3.86	0.64	3.52	0.50	1.423	ns
7	教育課程の進度の遵守	3.78	0.92	3.73	0.94	0.131	ns
8	高校と比べての授業展開	3.29	1.03	3.73	1.08	-0.993	ns
9	7割程度以上の内容理解	2.78	0.42	2.73	1.22	0.125	ns
10	生徒とのコミュニケーション	2.78	0.92	3.15	0.87	-1.115	ns

\*p<.05, ns p<.ns